

今週のメニュー

■トピックス

- ◇「震災から3年、住まいエンベロップ・デザインを改めて考えるシンポジウム」
－IN 仙台－

■随想

- ◇樹脂サッシの歴史（2）

樹脂サッシ工業会 業務委員
(株)エクセルシャノン 大木 茂

■編集後記

■トピックス

- ◇「震災から3年、住まいエンベロップ・デザインを改めて考えるシンポジウム」
－IN 仙台－

塩ビ工業・環境協会主催の住宅エンベロップ(外皮)に特化した「震災から3年、住まいエンベロップ・デザインを改めて考えるシンポジウム IN 仙台」を、100名の参加を得て、10月10日午後フォレスト仙台で開催致しました。当日は、前日まで仙台に向かっていった台風も、シンポジウムの熱気で消滅したのか晴天に恵まれ、盛況に終了いたしました。シンポジウムの概要を以下に紹介いたします。

冒頭、当シンポジウムの代表を務めていただいている(独)建築研究所の坂本雄三理事長より、省エネルギー基準の断熱水準の義務化を想定し、今まで数十年かけて培ってきた、断熱という住宅の「質」を左右する技術を、東北という地域にあったエンベロップに生かして欲しいとのご挨拶がありました。

基調講演で「住まいと環境 東北フォーラム」吉野博理事長は、地域特性を生かした省CO2型復興住宅を考えるにあたり、最低限必要な条件および設計の考え方について、「高断熱・高气密と長寿命」「安心・安全」「成長できる住宅」「自然エネルギー利用の導入」「微気象の配慮と利用」「最適な住宅設備の導入」の6項目の整備の必要性を話されました。



講演会の様子

東北芸術工科大学 三浦秀一准教授は、東北地方の復興に必要なものを「安全快適な住まい」「安全なエネルギー」「住み続ける為の雇用」の3つとして、先生が手がけられた山形の住宅を題材にして、地域の特性を生かした建材(木)+断熱建材+自然エネルギーを利用して循環型の町作りをしていくべきと述べられました。

一方、行政の立場から復興庁 林俊行参事官は講演「住宅・まちづくりにおける復興の現状と課題」で、復興に向けたロードマップについて、がれきの処理はまもなく終了するが、住宅の復興再建は遅れており2年先ごろがピークとなるだろう、また、住宅を再建するにあたっての住宅減税や給付金などは条件として質を問うものとなっていないが、これから大きな課題となるかもしれないと話されました。

最後に行われた北方建築総合研究所 鈴木大隆部長の講演では、北海道以外の地域では住宅の高断熱化が進んでおらず東北に至っては北海道とほぼ同じ量のエネルギーを消費していること、消費エネルギーを戸あたりではなく1人あたりで評価したり、エネルギー総量を減らすこと、同時にシーズンピークカットにどう取り組むかなどを話されました。また、冬の災害でインフラが断たれ孤立した時、病気にならずに救援を待てる良い性能の住宅でなければならないこと、断熱化することにより保温箱となり住みにくいという人がいるが、日本古来の伝統技術である通風や庇など日射遮蔽に学び、今の技術（例えばガラスでの遮蔽）を加えれば夏のピーク温度は下げることができることなど、質と省エネの両立が住宅において非常に重要であり、その中で住宅を作る際、何にお金をかけるかを十分考えてほしいと提言されました。

第2部のパネルディスカッションでは、鈴木部長をコーディネーターとして、震災復興住宅供給最前線からヒノケン(株)日野社長、「住まいの再建を考える会」の武蔵代表を交え、地元のホームビルダーの必要性や地元の森林資源を使い一緒に再建していく重要性が語られました。

更に、鈴木コーディネーターより陸前高田に建てられたモデルハウスが住民に夢を与える場となっており、今までの近隣コミュニティを継承するには南側の大きな（掃き出し）開口部が必要になるという「コミュニケーションと空間作りと窓」の重要性が紹介されました。



パネルディスカッションの様子

その窓については、住宅性能に及ぼす役割を旭硝子(株)木原主幹より、住宅の中で熱の出入が一番大きな部位なので、エンベロップ（外皮）の中でも開口部は最も大きな設計のポイントである。その中で枠も意識して欲しい、窓を考えることは、枠とガラスを旨くチョイスすることであり、そうすることにより結露が減少しカビやダニが防げ、ヒートショックなどの健康面も向上する。ガラスもどんどん進歩しており、日射の多い南側の大きな窓に対しても、断熱・遮熱に有効なガラスを使用すれば省エネできると説明されました。

最後に鈴木コーディネーターは、住まいの再建、全国の地域再生に建物のエンベロップは重要であり、震災復興の中でいいモデルを作り全国に発信していかなければならないと纏められました。

尚、11月22日には2回目の「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム ー住宅断熱の新たな水準について考えるー」と題して、東京大学伊藤国際学術センターにて開催いたします。[ご来場ください。](#)

◇樹脂サッシの歴史（2）

樹脂サッシ工業会 業務委員
(株)エクセルシャノン 大木 茂

今回は日本での樹脂サッシの現状についてお話しします。

最近、国を挙げての省エネ取り組み、CO2対策のために、住宅などの建築物にも高い省エネ性能が義務化される方向となってきました。

アルミサッシも結露対策として、樹脂材を室内側に使ったものが主流になりつつあります。これを業界ではアルミ樹脂複合サッシとかハイブリット構造などと言ったりしています。ちなみに日本では、窓枠のことをサッシ（正しくはサッシュ？）と呼んだりしますが、同じ意味で使われています。

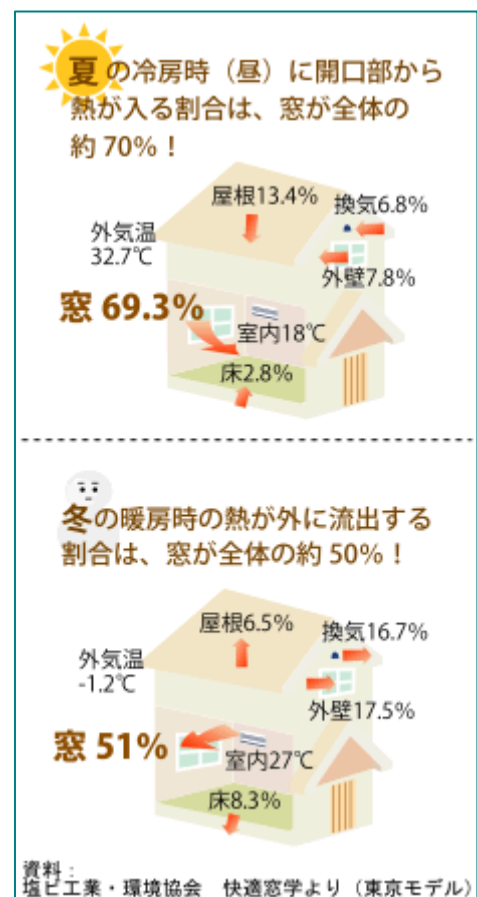


不思議なことに日本の建築業界では長らくガラス業界とサッシ業界は別々の業種として捉えられて来ました。ゼネコンによるビル工事などでは別々の発注工事なので、そうなったのかも知れませんが、ユーザーサイドから見れば窓枠は単にガラスを入れるための枠でしかありませんので、窓枠、そもそもその材質にこだわりを持つユーザーは、おられないかもしれません。むしろ建築物の窓にはガラスは欠かせない構成部品ですので、ガラスが主役で窓枠は脇役と考えられますが、これらをセットにした「窓」としてみたほうがよさそうです。

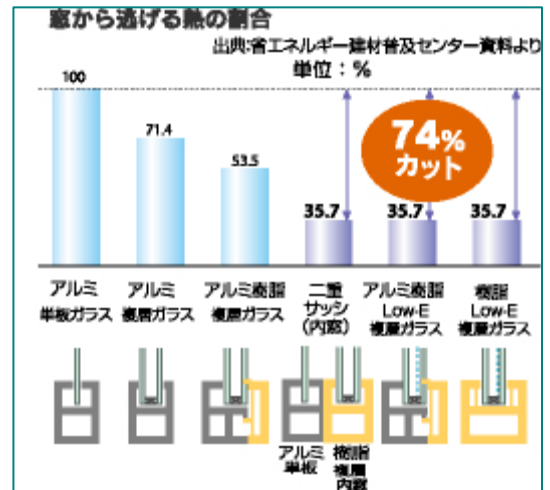
したがって、「窓」として、その機能、性能を評価すべきであるという、最近の行政の考え方はいたって合理的なものだと思っています。

最近、行政では省エネ・CO2対策の観点から建物全体の消費エネルギー量で建物の性能を評価する方向になっています。そのため、太陽光発電などの再生可能エネルギー設備、高効率エアコン、燃料電池などを利用した設備によって構成される、スマートハウス、ゼロエネルギーハウスを購入したユーザーには様々な優遇措置が用意されています。これはすばらしい技術革新だと思います。ただしこうした設備の寿命は恒久的なものではありませんし、定期的なメンテナンスや部品の交換などの費用もかかります。その点、建物自体の断熱性能を向上させることは、恒久的なトータルエネルギーの節約および居住性の向上につながります。

また断熱材や窓といった構造体に直接かかわるものは、後からリフォームで行おうとすると大変工事手間がかかりますので、余計なコストがかかってしまうこととなります。



住宅の断熱対策の一つとして、窓の断熱性能の向上が求められています。今の断熱基準（平成11年基準）に適合する住宅において、冬季に窓からの熱ロス、家全体の約50%という調査結果があります。逆に言えば窓の断熱性能を上げることが一番効果的な断熱対策ということになります。窓をアルミサッシから樹脂サッシに変えることが最も簡単で効果的な方法なのです。ちなみにアルミと樹脂の熱伝導率は、素材比較で約1000倍の差があります。アルミ金属を、室内と室外の接点となる窓枠に使うことは、断熱的な観点から見れば不適切ではないでしょうか。



(つづく)

⇒ [バックナンバー](#)

■ 編集後記

東京オリンピック開催決定のニュースは、日本経済の大いなる起爆剤になると見なされ、日本全体の再活性化に繋がるという報道がされてきました。しかしながら、福島などの震災地域の方々の本音は、オリンピック開催により復興が遅れるのではないかとということにあると聞きました。仮設住宅問題、汚染水問題、そして除染問題など解決しなければならない問題は山積であり、決してオリンピック開催が復興の遅れになってはならないと思う今日この頃です。(KT)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp